

第三十五回和辻哲郎文化賞 学術部門受賞作

渋谷 治美 著『カントと自己実現——人間讃歌とそのゆくえ』

(2021年10月25日刊 花伝社)

渋谷 治美 しぶや・はるよし

埼玉大学名誉教授

1948年(昭和23年)7月25日 74歳 静岡県御前崎市出身

専門は、倫理学、総合人間学、カント思想

1972年3月、東京大学文学部倫理学科 卒業(学士号取得)。1975年3月、東京大学大学院人文科学研究科修士課程倫理学専門課程 修了(修士号取得)。1978年3月、同博士課程倫理学専門課程 単位取得満期退学。1979年4月、東京大学助手(文学部倫理学科)。1982年4月、埼玉大学講師(教育学部)。1984年4月、同助教授。1996年冬学期、ウィーン大学哲学科客員教授。1997年4月、埼玉大学教授(～2014年3月)。その間、同大学教育学部長(2004年4月～2008年3月)・同大学副学長(2008年4月～2010年9月)を務める。2015年4月、放送大学特任教授となり、同大学埼玉学習センター所長を務める(～2019年3月)。

主著に、『逆説のニヒリズム』(花伝社、1994年、新版;2007年)、『シェイクスピアの人間哲学』(花伝社、1999年、改題新版;『リア王と疎外 シェイクスピアの人間哲学』2009年)。共編著に『現代カント研究3 実践哲学とその射程』(晃洋書房、1992年)、『死生観と生命倫理』(東京大学出版会、1999年)、『ニヒリズムからの出発』(ナカニシヤ出版、2001年)、『ニヒリズムとの対話—東京・ウィーン往復シンポジウム—』(晃洋書房、2005年)など。翻訳に、G.ペルトナー『美と合目的性—カント『判断力批判』の批判的蘇生—』(晃洋書房、1996年)、I.カント『実用的見地における人間学』(『カント全集 15』所収)(岩波書店、2003年)、G.ペルトナー『哲学としての美学 〈美しい〉とはどういうことか』(監訳)(晃洋書房、2017年)がある。

受賞のことば

拙著『カントと自己実現——人間讃歌とそのゆくえ』が、このたび和辻哲郎文化賞(学術部門)の受賞作に選ばれましたことを、たいへん光栄に、また嬉しく存じます。それにはいくつかの理由がございます。第一に、和辻哲郎博士は学問のうえで私にとって曾お祖父さんに当たるからです。つまり、私の恩師の恩師の恩師が和辻先生なのです。第二に、修士論文に取り組んで以来50年に亘るカント研究の総決算である本書が、随所でこれまでのカント解釈に異を唱える内容であるにも拘わらず、学術の世界において暖かく迎え入れて頂けたことです。第三に、かつてないほどの緊迫感を伴って人類の存続が問われる今日、『永遠平和論』で有名なカントの「人間讃歌」思想が、受賞を機に、人類の「ゆくえ」にまで思いを巡らせながら、改めて省みられるかもしれないと期待されるからです。今回の受賞につきまして、清元姫路市長、藤原姫路文学館長、選考委員会・推薦会の先生方、加えて、平和を愛するすべての姫路市民の皆さまに感謝申し上げます。

《選考委員評》

清水 正之

渋谷治美氏の『カントと自己実現——人間讃歌とそのゆくえ』は、従来さまざまな像が提示されてきたカント研究の中でも異色のスタイルといえる。渋谷氏は従来のカント像のそれぞれにあたることは抑制して、読者の前に難解で知られるドイツ語原典や翻訳例を提示しつつ、自身の読みを明示するという形式をとって始める。一言でいえば、その分析的なカント原典を総合的な方向に読み切り、渋谷氏の考えるカント像を再構築しようとするのである。

実質的には、カントの哲学の及ぶ領域である存在、自由、価値の三領域を串刺しにして、矛盾なきカント像を再構築しようとするといえる。その際、「自由論」こそカントの思索の最高点であると「考えたい」と渋谷氏はその狙いを述べる。

本書は、研究者としての長期にわたる諸論考を再構成した著作であるが、驚嘆すべきは、研究の歩みを始めた当初からの見通した方向が、最後までぶれず一貫している印象を与える点である。

分析的原典を、総合的なテキストとして再構成するにあたって、渋谷氏は、第一批判『純粹理性批判』のとりわけ演繹論等を文法的な解説を含め読み解くことから始める。『純粹理性批判』の特徴的な読みは、「純粹統覚と経験的直観のふたつに引き裂かれる人間」がどのように再度一つの「私」となるかを探ることであり、その際に、内部と外部を二元的とするのではなく、「内部直観に確実に外部の物に相応した客観性が移し込まれており、内部の純粹統覚の成立はほぼ同時に、私の客観面も含まれた」「物自体」を含む外部世界を形成している、というところに着目する点であろう（第Ⅰ部）。私の受容性である感性は、自発性の悟性をとおして、経験的世界の変容を働きかけ、外部に持続的な影響を与えている、という人間観である。その過程にこそ「自己実現」があると理解されるとき、この読解の意味はあるだろう。カントの疎外論はしたがって人間性が失われることではなく、自らの経験と知的活動が豊かに外化していくことであると解される。

議論がなされるところであろうが、断言しつつ反証には周到に対応しようとする著者の姿勢は、いわば開放系の解釈であり哲学的立場であり、現代的意義を感じ取れた。幸福の追究において「仮言的価値」を限定的にであれ「定言的価値」を豊かにするものとみる視点、キリスト教の黄金律の解釈など（第Ⅱ部）、後半の論点も冒頭の第一部の読解の基盤に上に論じられ興味深い。この著作を高く評価した上で、自然科学とニヒリズムとの関係は、また、はたして他者との協働的世界はカントをふまえるとどのように成立するのか、等著者の考えをあらためて知りたくなる。

野家 啓一

渋谷治美氏の『カントと自己実現——人間讃歌とそのゆくえ』は、著者の半世紀にわたる着実なカント研究の集大成であり、文字通り「労作」と呼ぶにふさわしい。そこで展開される片言隻句をもゆるがせにしない緻密なカント読解の成果は説得的であり、読解のために引かれた何本かの補助線は、これまでのカント像を一新する鑿跡を刻している。

まず第Ⅰ部の「認識存在論」という標題は、人間の認識の仕方は人間の存在の仕方にはほかならないという両者の表裏一体性を示唆している。そこから著者はカントの人間観の核心を「存在・自由・価値」の三位一体構造として掘み出し、とりわけ価値論を「人間の自己実現」という観点から重視する。その上で「カントにおける超越論的四極構造」（純粹統覚／内感[時間]／外感[空間]／物自体）がカント哲学全体の見取図として提示される。先に補助線と呼んだゆえんである。続いて著者は従来見逃されてきたカントにおける「身心問題」を主題化し、カントはいわゆる身心問題を人間的自由論として「止揚」したのだと主張する。議論を呼ぶであろうが、卓見というべきであろう。

次に第Ⅱ部「実践価値論」では、有名な「実践理性の優位」のテーゼを二層構造として捉え直し、「純粹実践理性」と「理論理性」の間に「実用実践理性」の働きを媒介させることによって、前二者の有機的結びつきを浮き立たせる。加えて認識論における「コペルニクスの転回」を価値論へと拡張し、カントは善悪の規準の拠り所を神（物自体）から人間理性へと移し替えたという。その代償としてカントは価値ニヒリズム（道徳的規準の崩壊）と紙一重の地点にまで進んだが、そのペシミズムから反転して「人間の叡智的自由」に全重量を賭けた点にカント実践哲学の要諦が存する。鮮やかなカント読解といわねばならない。

最後の第Ⅲ部では愛国心、大学論、『人間学』の諸問題が俎上に載せられ、カントが思い描いていたであろう「人類の自己実現」がゆるやかに眺望される。総じて本書は後進の優れた里程標ともなるべき充実したカント研究であるが、そのためにも巻頭に自己実現をめぐる総論と巻末に索引の付加を著者に求めるのは望蜀の言であろうか。とまれ、和辻哲郎文化賞（学術部門）にふさわしい作品を選び得たことを他の選考委員とともに喜びたい。

関根 清三

今年度の受賞作『カントと自己実現——人間讃歌とそのゆくえ』の著者・渋谷治美氏は、選者の親しい友人である。バイアスがかかるといけけないので、選考委員会では最後に発言することとして公正

を期したが、推薦会もトップで通過し、選考委員会でも全員一致で受賞作に選ばれ、こんな嬉しいことはない。

近年、カントはしばしば批判され、過去の遺物とされることさえある。ヘーゲル以降かまびすしいその批判は特に、〈主観—客観〉図式の限界と、啓蒙思想の逆説へと向けられ、前者からは人間性の疎外が、後者からはニヒリズムが導かれるとされる。しかしカントが人間性を、疎外するどころか目的それ自身とし、またその尊厳を最高価値として尊ぶ、そのような価値体系を終始持して来た、と渋谷氏は読み、その価値体系を「人間讃歌」と呼ぶのである。勿論その価値体系は、揺るぎないものではない。人間は個としても類としても、死へと向かっているからである。副題に「その行方」、すなわち価値ニヒリズムが示唆される所以である。しかしニヒリズムに沈淪することなく、遅くとも数十万年後には到来するであろう滅亡に至るまでは、人類は果敢に「自己実現」を追求し続けよう、と渋谷氏は提案する。

デカルトの「我思う、ゆえに我あり」の「我思う」を、カントは己の認識論の鍵語として「純粹統覚」と呼ぶ。この純粹統覚は能動的な働きであるから、受動的な認識の対象とはなり得ない。しかし「我」以外の様々な事物を、対象として認識することはできる。そしてこの私の認識の仕方が、私の存在の仕方となっていく。すなわち、この他者認識に仮託して、私の存在も明らかとなっていくのである。渋谷氏の言う「自己実現」とは先ずこのことを指す（第Ⅰ部）。ところが、この他者は単に事物だけでなく、他の人間を含み、人間関係の道理が道徳だとすると、道徳の実践において、「自己実現」はよりはっきりと自覚される。しかもここで道徳を遂行することが幸福にも結び付き、徳福の一致としての最高善が追求され、自己は認識を超えて実践の段階での実現へと深まっていく（第Ⅱ部）。更に自己は、人類的規模においては、世界市民思想に基づく共和制のもと、永遠平和を希求し、ここに最高の実現を目指すのである（第Ⅲ部、あとがき）。

書名に託された意味を中心に、著者の主張の基本線を大きく纏めるならば、以上のようになるであろうか。しかし本書の新しい主張は他にも、様々なテキストの精緻を極めた読解を通して、随所に鏤められている。例えば、そもそも悟性の「自己実現」として「経験」が成立するとする構想は、デカルト以来の身心問題のカント的解決として着想されたこと、「観念論論駁」の定理の主語には、純粹統覚と経験的統覚の二重の現存在意識が重ねられて籠められていること、また『基礎づけ』と『第二批判』の純粹道徳の根本原則はイエスの黄金律を批判する含みを持っていたこと、両著の間には、道徳法則と自由のどちらからどちらを権利証明するべきかについて戦術転換があったこと、さらには『啓蒙論』のフリードリヒ大王賛美や『人間学』『宗教論』『大学論』の論述の端々に、カント一流の「二枚舌」論法が隠されていること等々。こうした数々の創見が相俟って、ヘーゲル以降の現代哲学のカント批判に対する逆襲となり得ているか否か、活発な論争が起こることを期待したい。いずれ

にせよ安易に批判し卒業するにはカントは偉大に過ぎ、その思索の徹底性は、渋谷氏が鮮やかに剔抉するところだが、カント自身、自分が立脚する感性界と叡知界の二元論の限界とそこから帰結する価値の崩壊に薄々気付きながら格闘したように、今に端倪すべからざるものがある。そのことをまた渋谷氏の端倪すべからざる徹底した緻密周到な読解が、我々に示してくれるのである。

渋谷氏は、和辻哲郎ゆかりの東京大学倫理学科に提出した修士論文以来、カント研究の実力者として知られながら、最初の著作は『逆説のニヒリズム』であり、次作は『シェイクスピアの人間哲学』（後に『リア王と疎外』と改題）であった。カントについては、数多の活字論文を発表され、また岩波版カント全集の『人間学』の明晰精細な訳注を物されていたとはいえ、著作を公にされることがなかった。しかし爾来半世紀、ここに満を持して、そのカント研究の精華を集成展開され、処女作以来あたたためて来られた氏自身の、「ニヒリズム」を踏まえた「人間哲学」と共振して語り尽くされた、その学の熟成に、半世紀待った甲斐があったとしみじみ思う。

待った甲斐があるのは、それだけではない。半世紀前の若き学徒が、思索し執筆しながら細部の限界を1つ1つ超えて行き、その自分がどこまで行くのかに心躍らせている様が眩しいのだが、その叙述を残しつつ、今や全体を鳥瞰する高みに達した大家の視点から、大きな理路を明晰に整理して語り直すという、その二重構造が功を奏している。

「少年易老學難成」と古人は嘆いた。しかし渋谷氏も私もお互い「階前梧葉已秋聲」を聴く齢となった今、「少年」の筆が「老學」の智慧と響き合って「學」が「成」ることを信じ得て、万感こもごも胸に迫るのである。